

## 口永良部島の火山活動解説資料（令和8年8月）

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

口永良部島では、山体の浅いところで地震活動がやや活発となっています。火山性地震は主に古岳火口付近の浅いところで発生しました。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は少ない状態で、GNSS連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和8年7月27日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

### ○ 活動概況

#### ・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2、図3-①、図4-①）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（7月：500m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を超える噴煙は観測されませんでした（7月：なし）。

19日から20日に山麓及び山上で実施した現地調査では、新岳及び古岳の火口内やその周辺の地熱域の分布や温度、及び噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

#### ・ 地震や微動の発生状況（図3-②③、図4-③、図5-①②）

古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震は、やや多い状態で経過しました。新岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。

火山性地震の月回数は151回（7月：206回）と前月に比べて減少しました。古岳火口付近の火山性地震は149回（7月：202回）、新岳火口付近の火山性地震は1回（7月：3回）でした。口永良部島の西側付近が震源と推定される火山性地震が1回発生しました（7月：1回）。新岳西側山麓付近の火山性地震及び、火山性微動は観測されませんでした。

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

---

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年9月分）は令和8年10月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図3-④、図4-②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり30トンと少ない状態でした（7月：10～30トン）。

・地殻変動の状況（図6）

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。



図1 口永良部島 噴煙の状況（8月18日、本村西監視カメラ）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（7月：500m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を超える噴煙は観測されませんでした（7月：なし）。

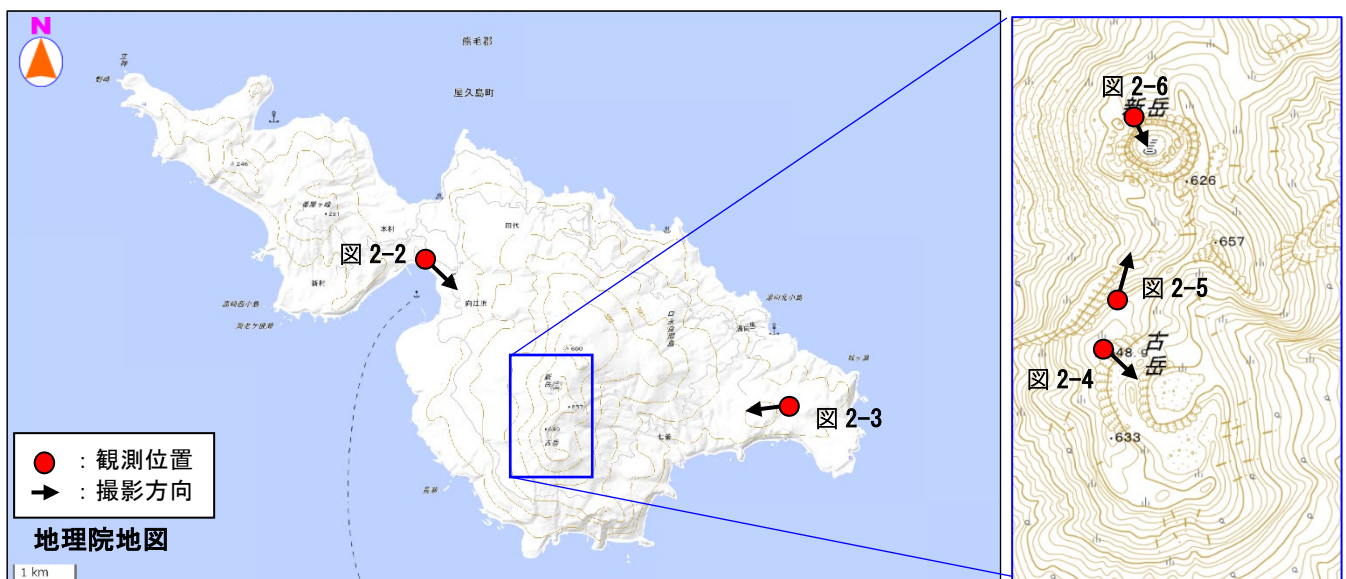


図2-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

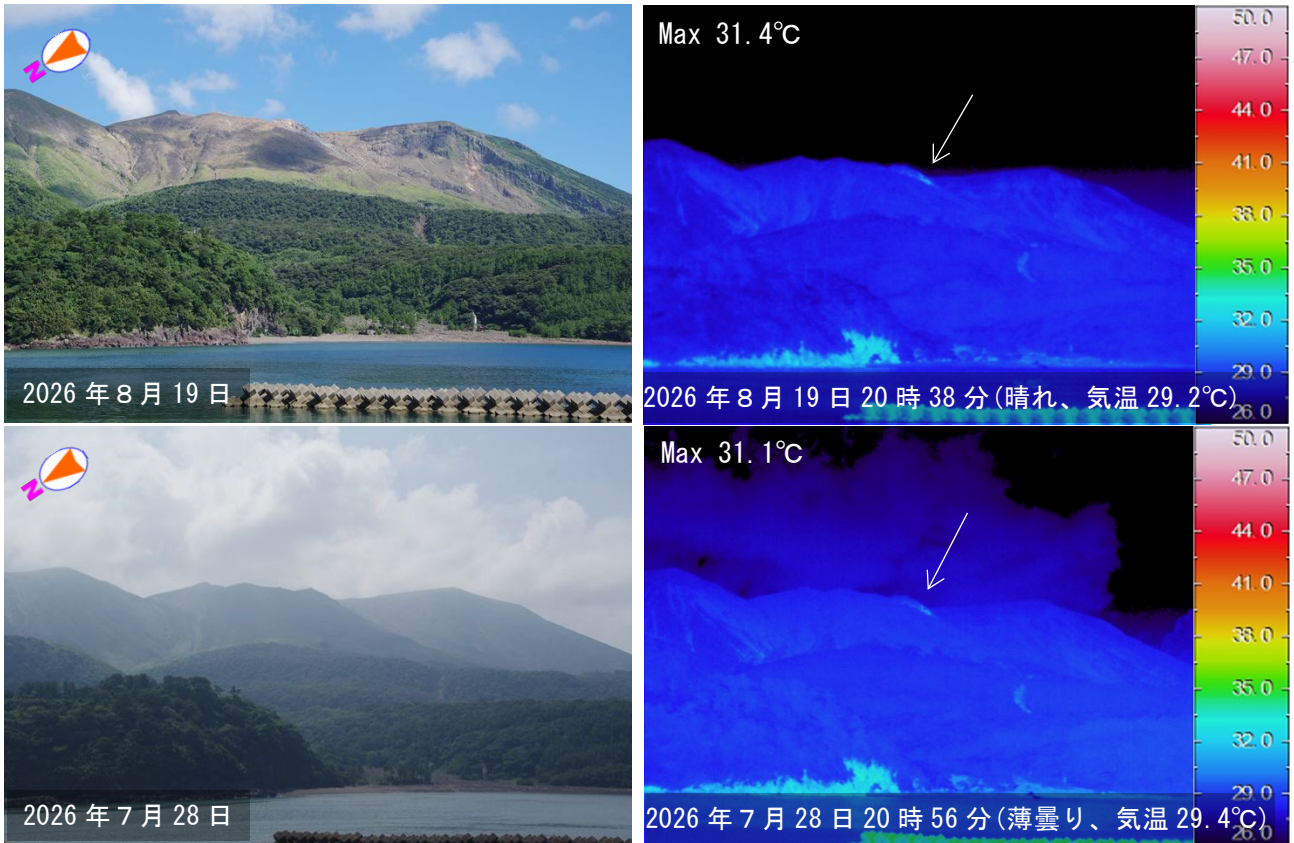


図 2-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

19 日に山麓で実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

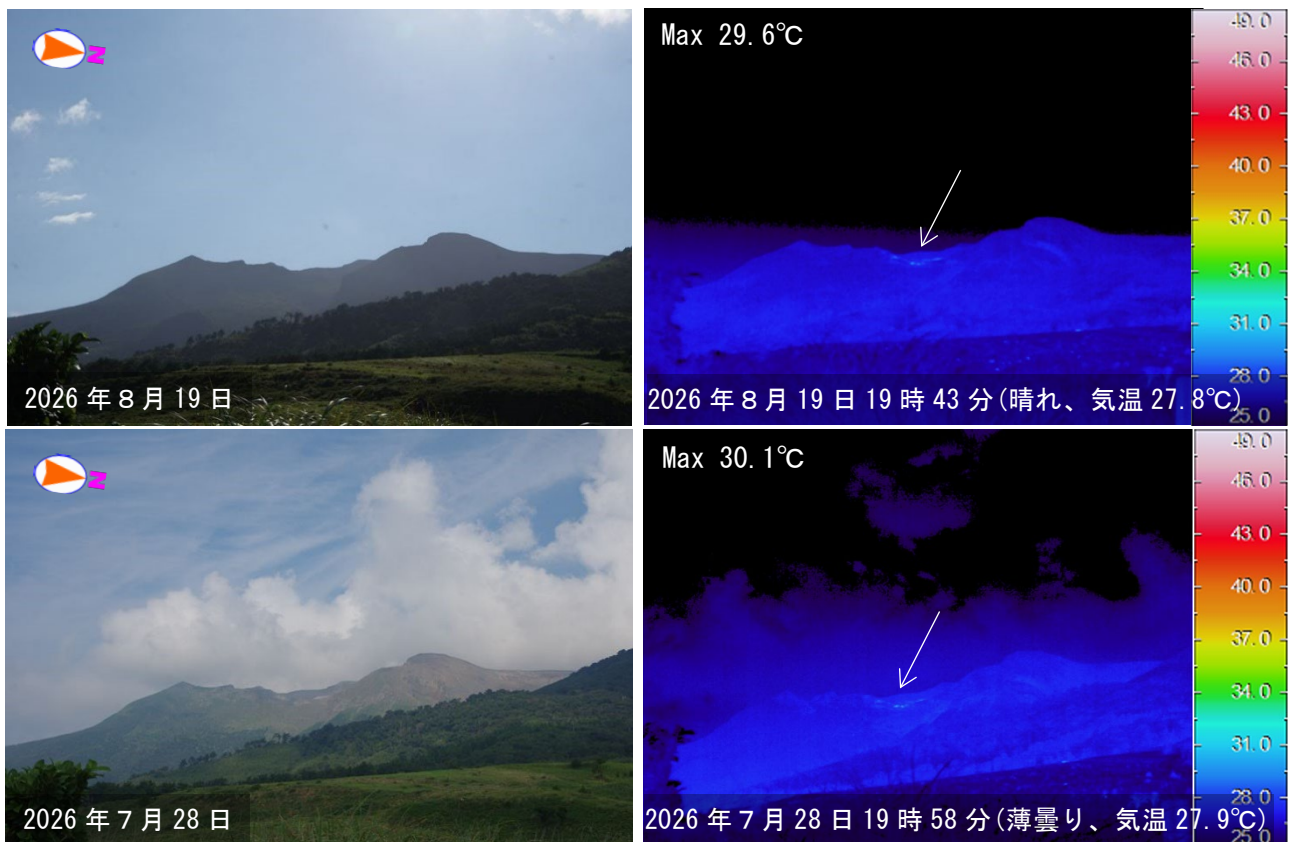


図 2-3 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

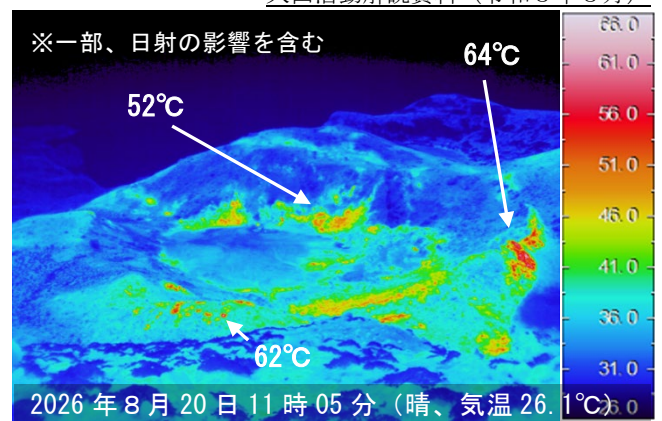
19 日に山麓で実施した現地調査では、古岳火口周辺において引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。



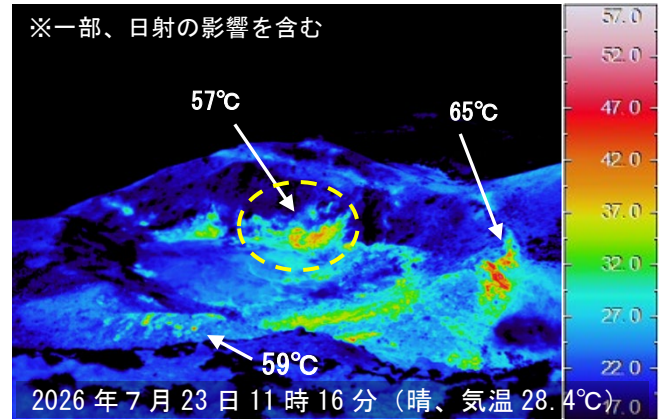
2026年8月20日



2026年7月23日



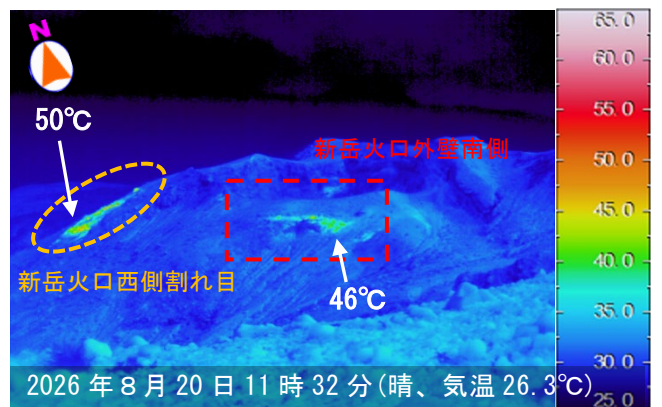
2026年8月20日 11時05分（晴、気温26.1°C）



2026年7月23日 11時16分（晴、気温28.4°C）

図 2-4 口永良部島 古岳火口内の状況（古岳山頂から観測）

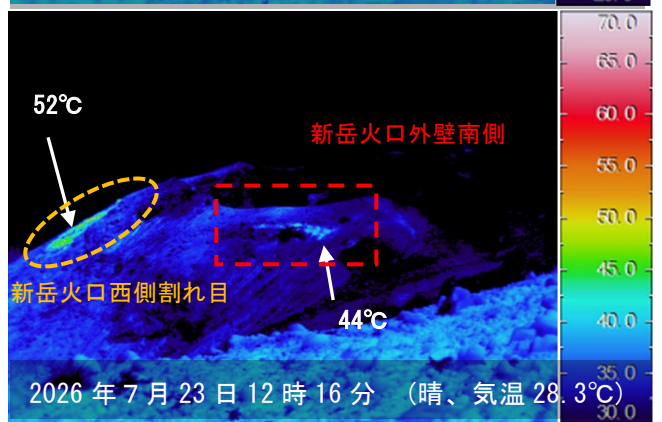
20日に山上で実施した現地調査では、古岳火口内及びその周辺で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。



2026年8月20日 11時32分（晴、気温26.3°C）



2026年7月23日



2026年7月23日 12時16分（晴、気温28.3°C）

図 2-5 口永良部島 新岳火口外壁南側付近及び新岳火口西側割れ目付近の状況（古岳山頂付近から観測）

20日に山上で実施した現地調査では、新岳火口周辺で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

※20日は機器障害のため、可視画像は取得できませんでした。

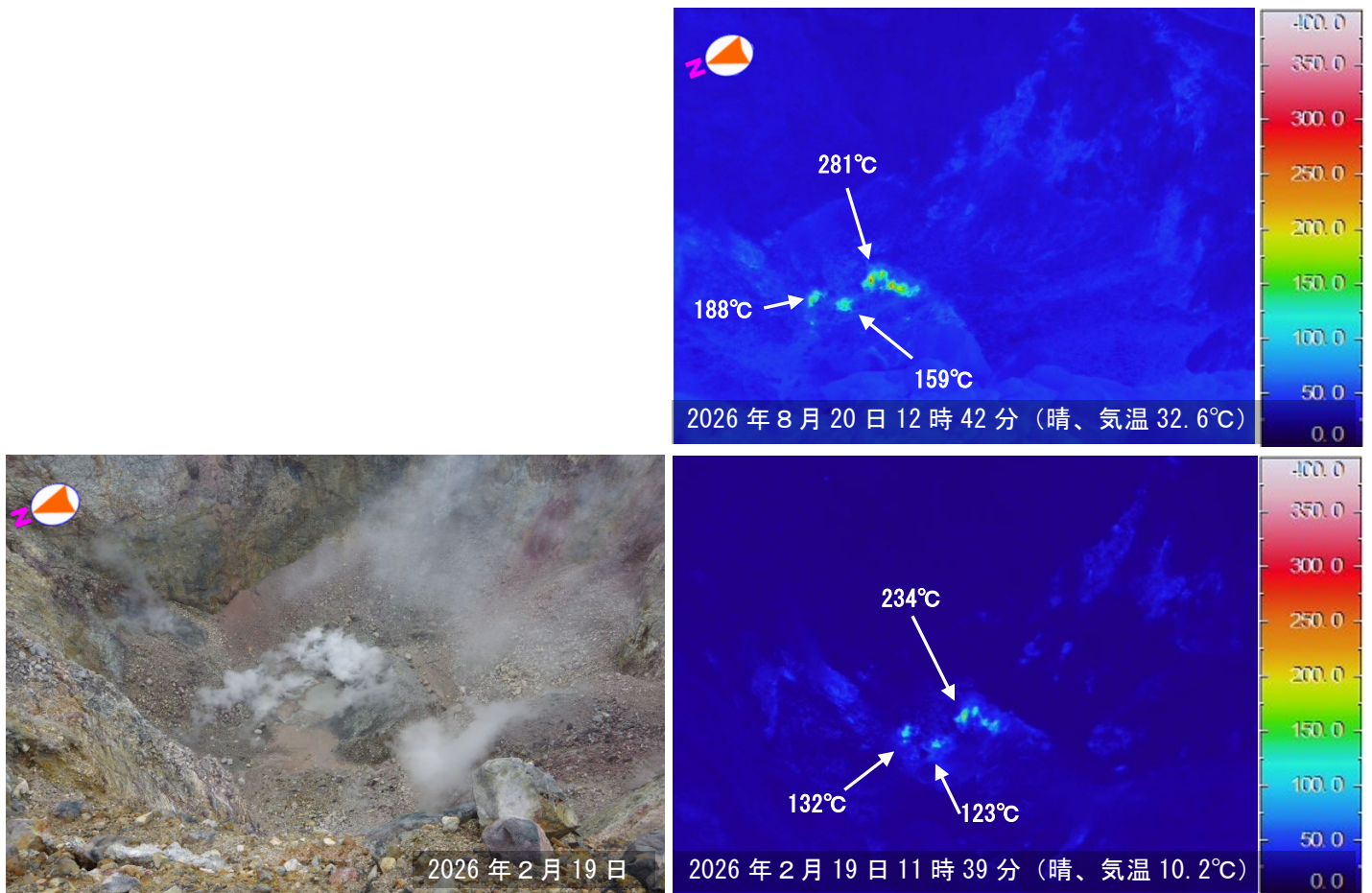


図 2-6 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳北西側火口縁から観測）

20 日に山上で実施した現地調査では、新岳火口内で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

※20 日は機器障害のため、可視画像は取得できませんでした。

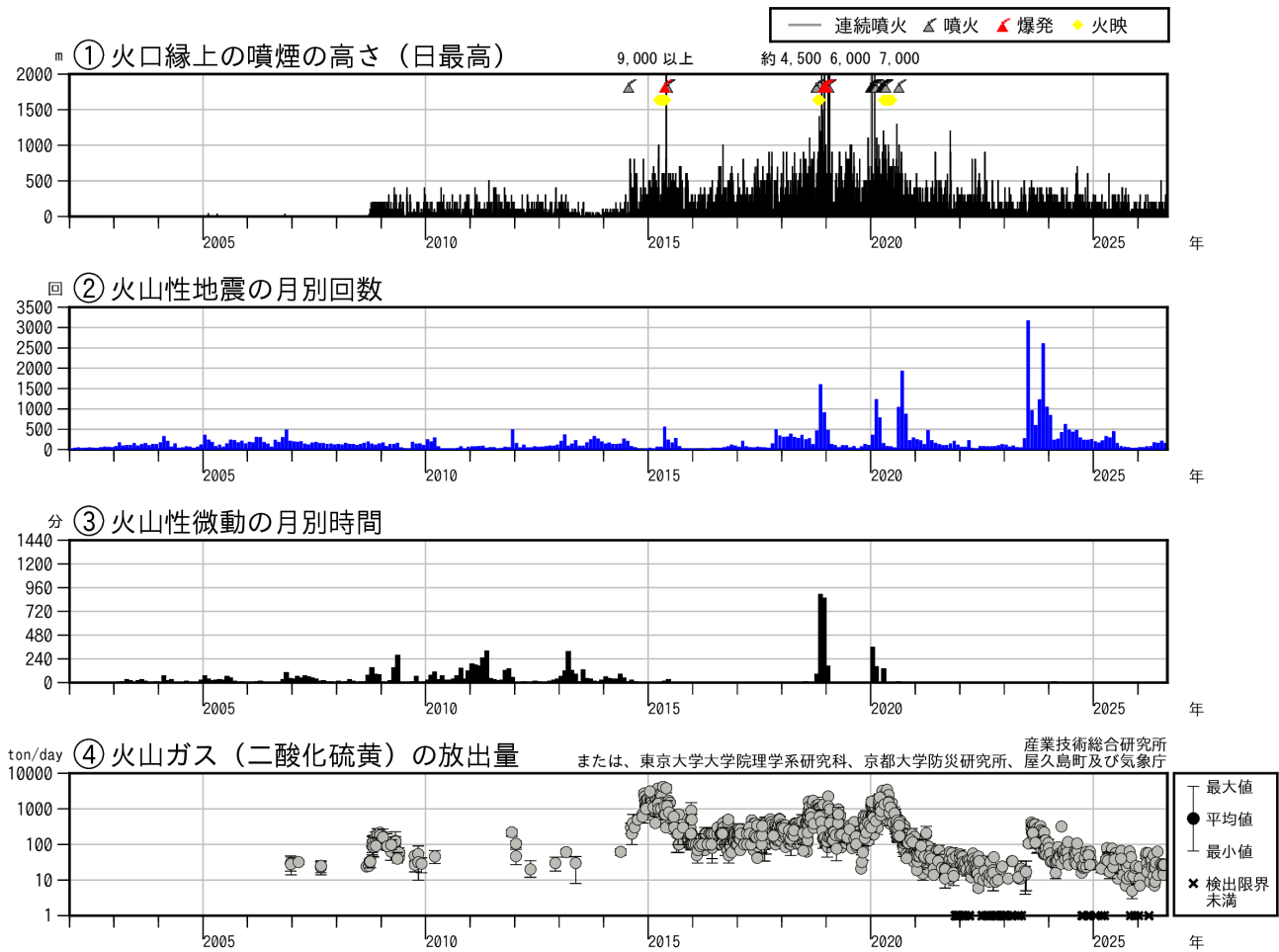


図3 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2026年8月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 $8.0\mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（京）（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0\mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。  
2017年12月13日から2019年1月16日までは古岳北上下動成分の計数基準を $6.0\mu\text{m/s}$ としています。

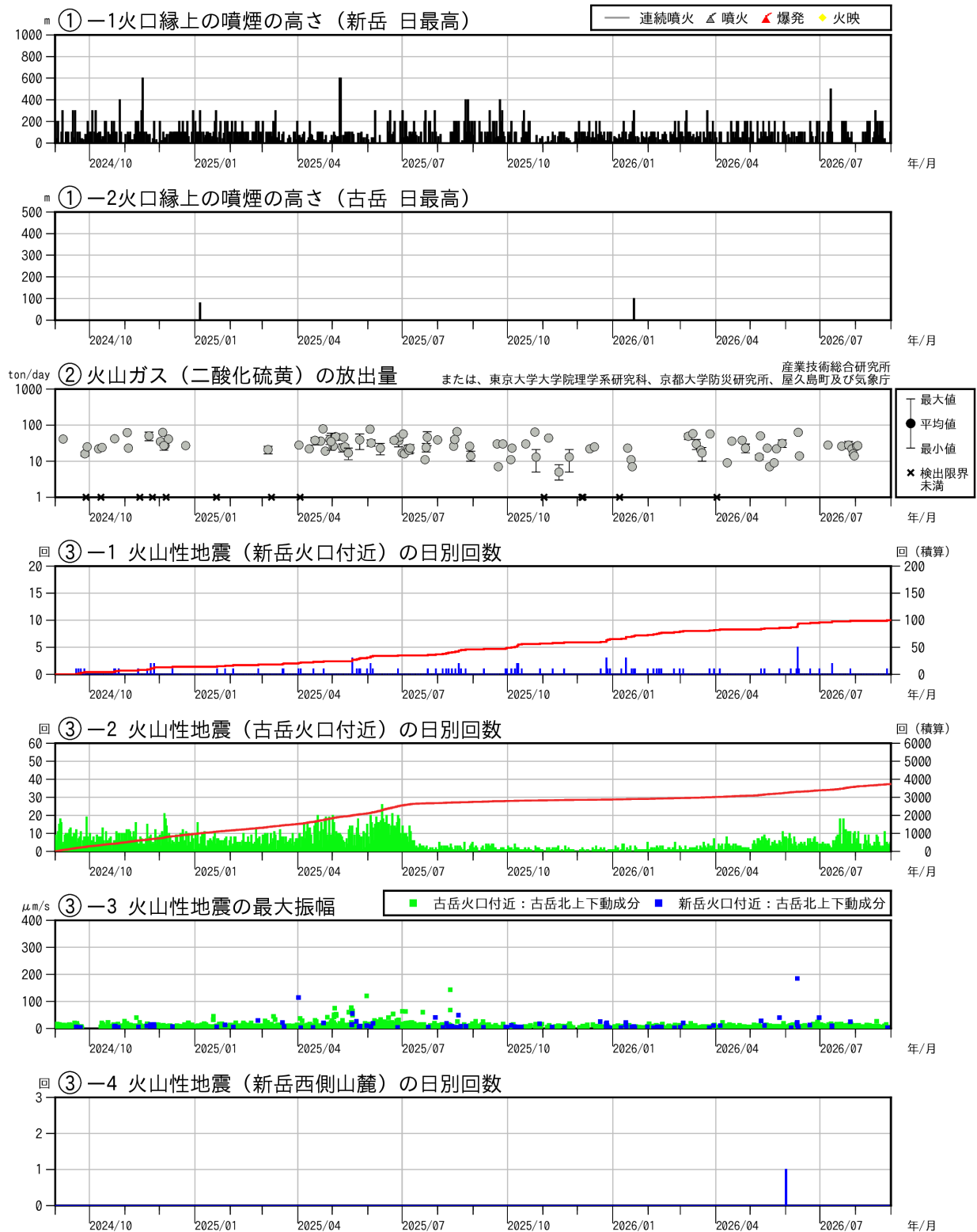


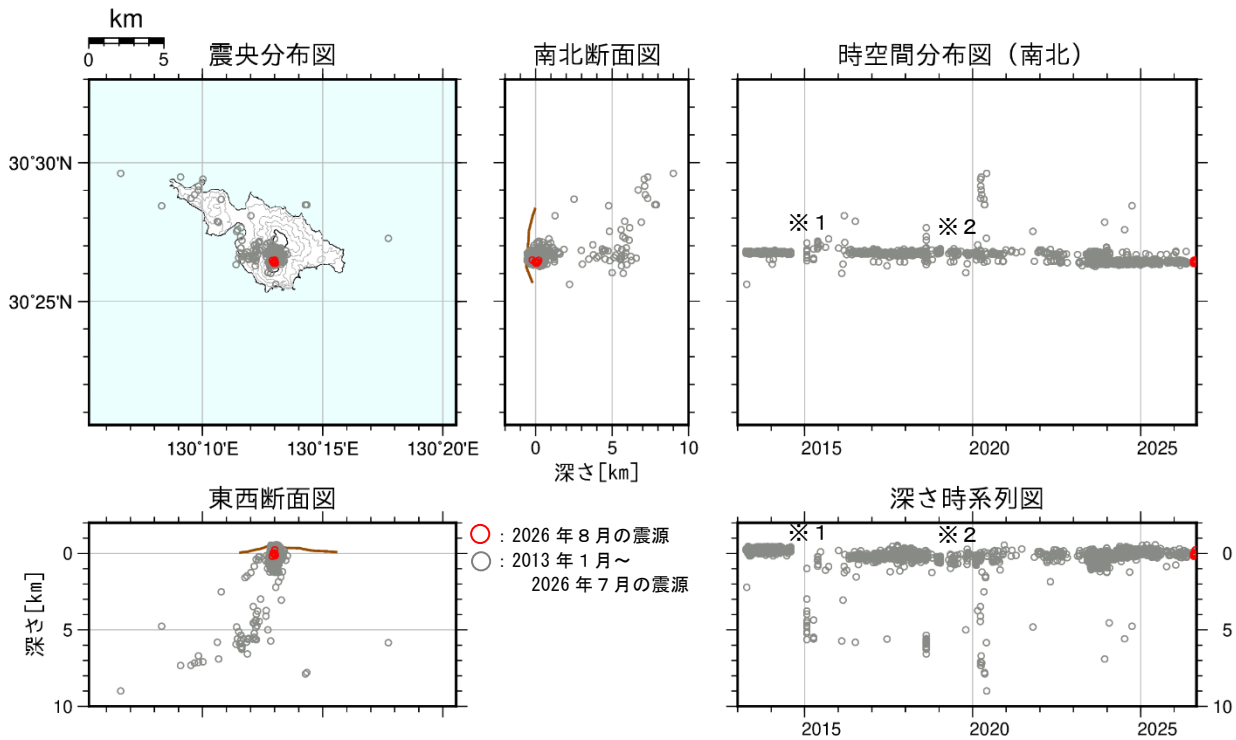
図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2024年9月～2026年8月）

## &lt;8月の状況&gt;

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（7月：500m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を超える噴煙は観測されませんでした（7月：なし）。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり30トンと少ない状態でした（7月：10～30トン）。
- ・火山性地震の月回数は151回と前月（7月：206回）に比べて減少しました。そのうち、古岳火口付近の火山性地震は149回（7月：202回）、新岳火口付近の火山性地震は1回（7月：3回）でした。口永良部島の西側付近が震源と推定される火山性地震が1回発生しました（7月：1回）。
- ・振幅の大きな火山性地震は発生していません。新岳西側山麓付近での火山性地震は観測されませんでした。

※③-3 古岳北観測点の障害のためデータが抜けている期間があります。  
赤線は火山性地震の回数や火山性微動の時間の積算（右軸）を示します。

## ①広域図



## ②狭域図

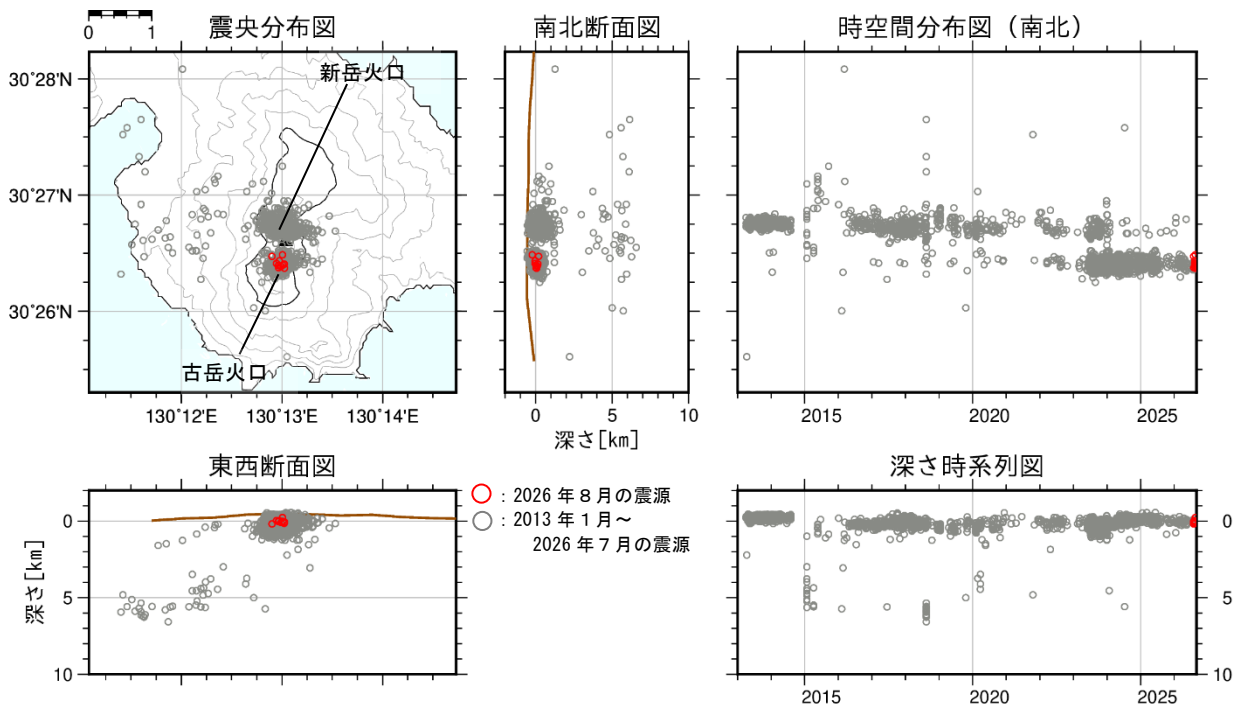


図5 口永良部島 震源分布図 ①広域図 ②狭域図（2013年1月～2026年8月）

### < 8月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日まででは検知力や震源の精度が低下しています。
  - ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日まででは検知力や震源の精度が低下しています。
- その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

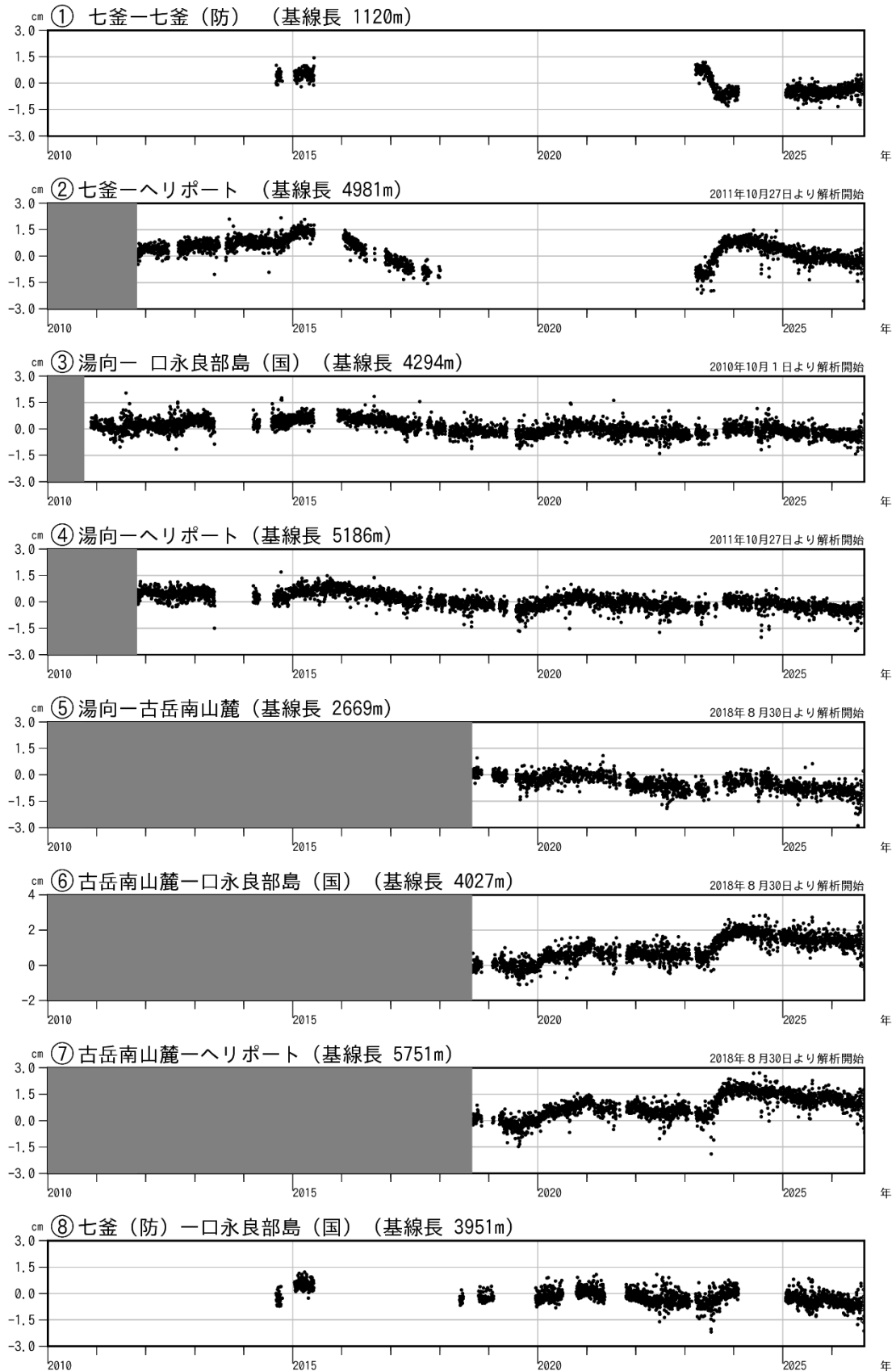


図 6-1 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 1 月～2026 年 8 月）

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図 7 の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

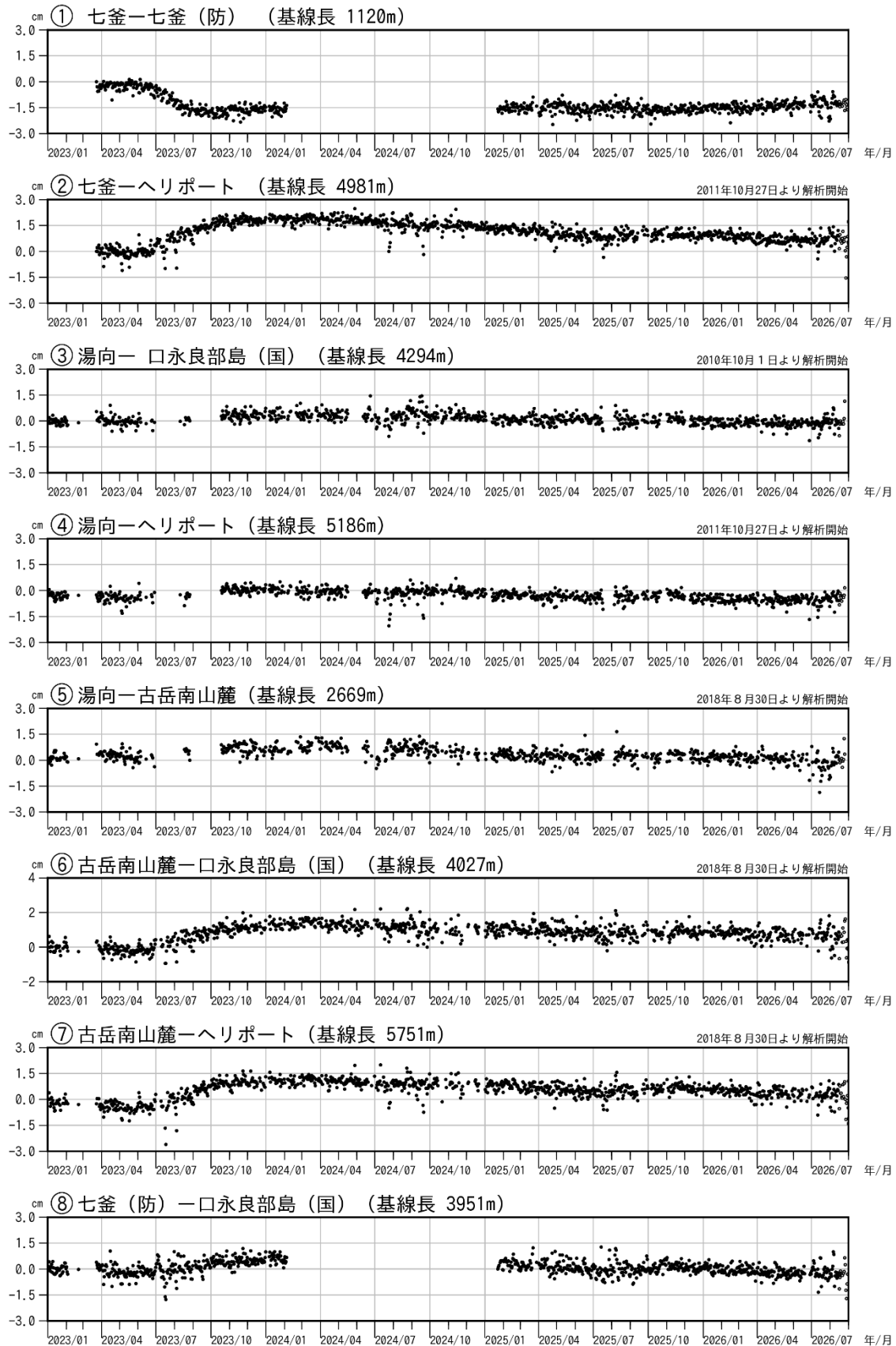


図 6-2 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2023 年 1 月～2026 年 8 月）

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図 7 の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

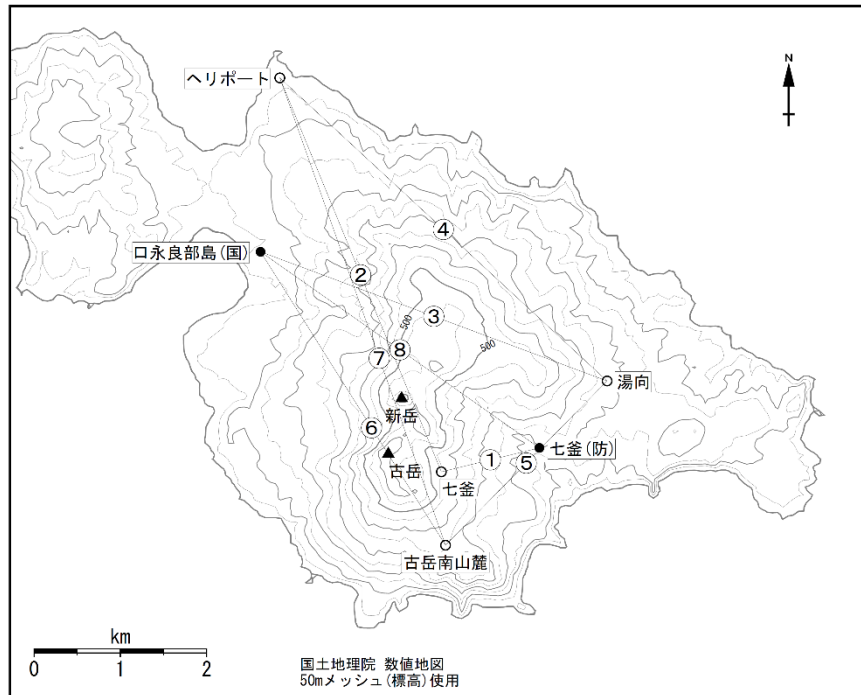


図7 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

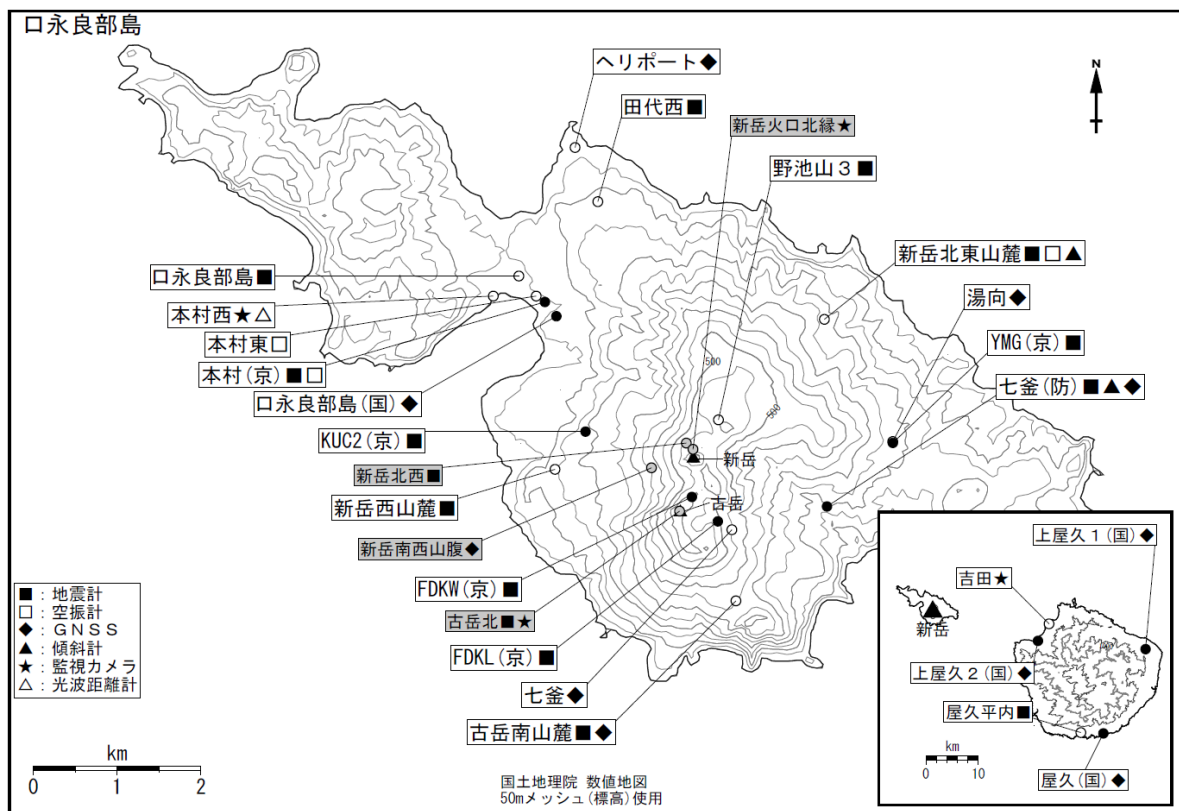


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。